

熊本らしい色彩景観を いかしていくために

1-4-1 周辺の景観の色彩を知る

●周辺の色彩を調べよう

熊本らしい色彩景観をいかしていくためには、既にそこにある周辺の景観がどのような色彩で構成されているかを知ることが必要です。計画地周辺の自然や建物を観察したり、写真撮影することで、その景観の色彩を客観的に捉えることができます。

また、こうした観察を一步進めて、市販の色票集や色見本帳を使って、より詳しく色彩を調査することも景観を知る有効な手段になります。

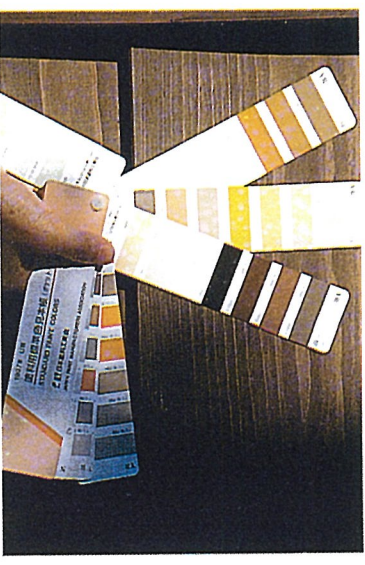


写真 市販の色見本帳を使った色彩の調査

●自然の色を知ろう1—緑の色彩

下の図は、一般的な樹木の葉や山の色を距離別に計測し、マンセル色度図に表現したものです。樹木の葉の色は、樹種によって基調色に幅があるばかりでなく、見る距離によって明度・彩度の幅が大きくなります。

また、落葉樹は秋に紅葉するため色相が大きく変化し、鮮やかさも増していきます。

実測して得られる植物の色彩は、私たちが通常記憶している「緑」よりも全般的に穏やかで、見る視点や環境によって移ろいやすいものです。

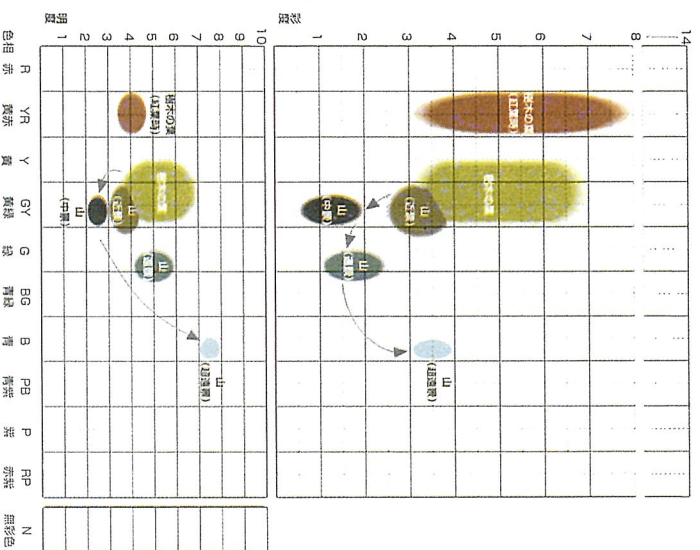


図 植物や山の色彩分布

●自然の色を知ろう2—石や土の色彩

下の図は、熊本県内で産出される石や砂、土の色彩の分布を示しています。

暗い阿蘇の土と明るい天草の石のように、明度には大きな開きがありますが、全体的にはYR(黄赤)系やY(黄)系の色相に属し、彩度は穏やかなことが特徴です。

各地域で伝統的に用いられてきた建材は、こうした石や砂、土などを原料につくられていることが多く、これらの色彩を知ることが地域の色彩を知る大きな手がかりになります。

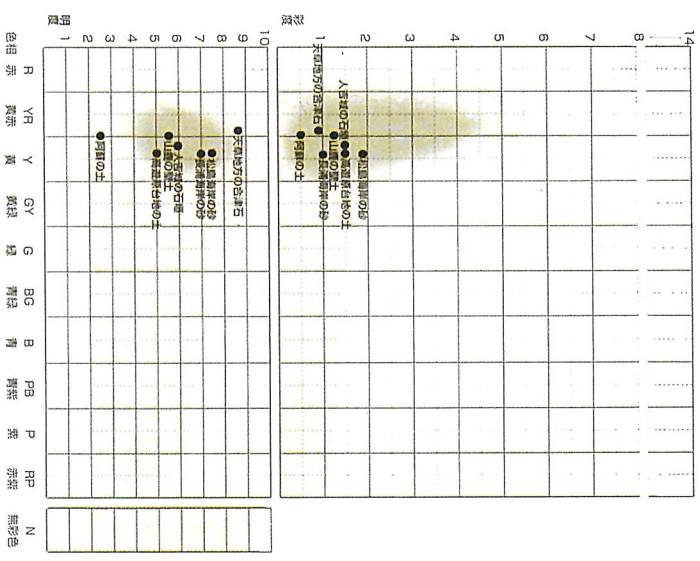


図 熊本県の石や土の色彩分布

1-4-2 周辺環境との関わり方を考える

●目立たせる色彩とひかえめにする色彩を分類しよう
周辺環境の色彩を把握したら、それらの色彩をどのように秩序づけたら景観がより良くなるかを考えます。
下の写真には、景観を構成するさまざまな要素が混在していますが、これらの要素を目立たせる必要があるものと、そうでないものに分けることが必要です。
公共的な視点から目立たせるべきものは彩度の高い色彩、ひかえめにすべきものは彩度の低い色彩を使います。

●建築物や工作物の基調色はひかえめに
下の図は、景観の中で目立たせるべき色彩とそうでない色彩の序列をまとめた例です。
こうした序列は、それぞれ地域の環境によって異なりますが、一般的に考えて、建築物や工作物の基調色は、どちらかというと背景としての序列、つまり、ひかえめにする色彩に位置づけることができます。
したがって、一般的な建築物や工作物の色彩は、景観において背景となる、自然の色彩や路面舗装色などと融和する、穏やかな色彩であることが基本といえます。



写真 熊本市内

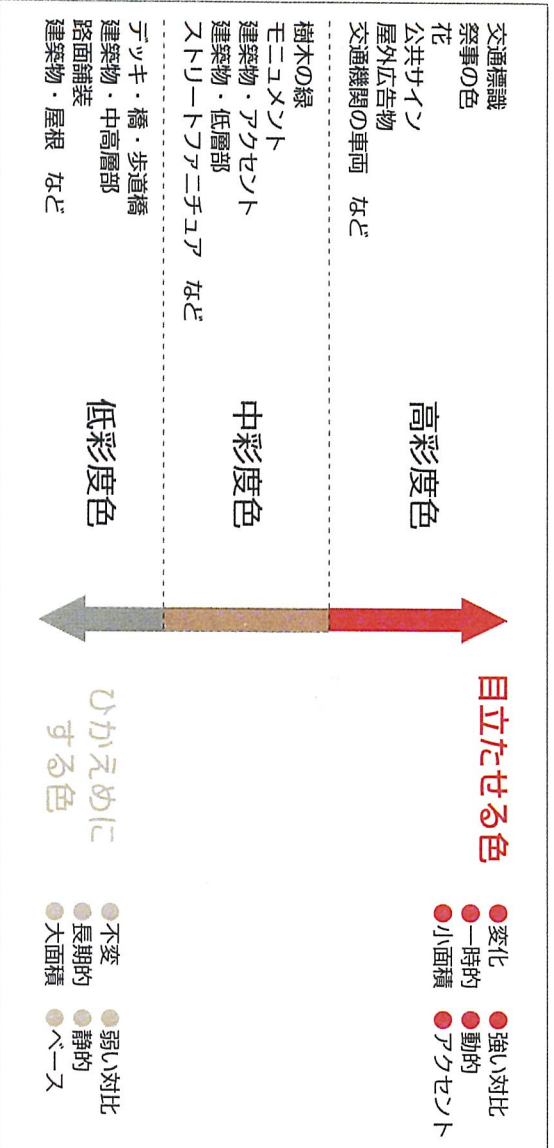


図 目立たせる色彩とひかえめにする色彩の順位(例)

●建物の連なりがまちなみをつくります
 建築物ひとつ、あるいは工作物ひとつでは景観は成り立ちません。ひとつの建物のまわりにはそれをとりまく環境があります。
 都市部では、隣り合う建物の連なりがまちなみを形成し、田園部や山間部、海浜部ではそうしたまちなみの周囲を豊かな自然が包み込んで、熊本らしい豊かな景観をかたちづけています。

●隣り合う建物とのつながりを考えよう
 隣り合う建物との色彩のつながりを考えることは、豊かなまちなみづくりの基礎になります。隣り合う建物どうしの色彩に共通性があれば、共通のイメージをもったまちなみになります。隣り合う建物の色彩が全く異なれば、にぎやかな反面、ややもすると混乱したまちなみになります。

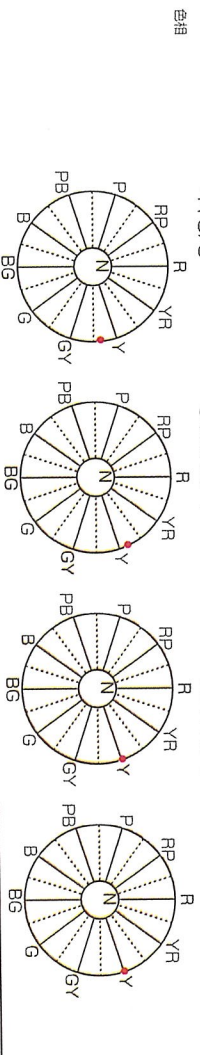
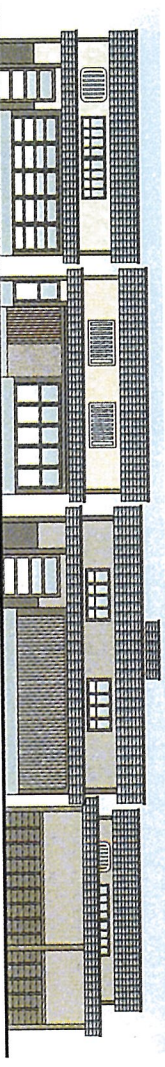
色彩に連続性があるまちなみでは

隣り合う建物の色の差が少なく、まちなみを構成する建物の色彩が一定の幅の中に収まっているため、まちなみに連続性や共通するイメージが生まれています。
 この図の例では、色彩ばかりでなく、建物の形態や規模などにも共通性が見られ、まちなみのイメージを増幅させています。

※色差とは、2つの色の差を表わす数値で、一般には、色差計という測定機器を使用して算出します。

同じ色相で、ワントセル明度が1違うと色差は10程度、ワントセル彩度が1違うと色差は5程度といわれています。

まちなみの様子



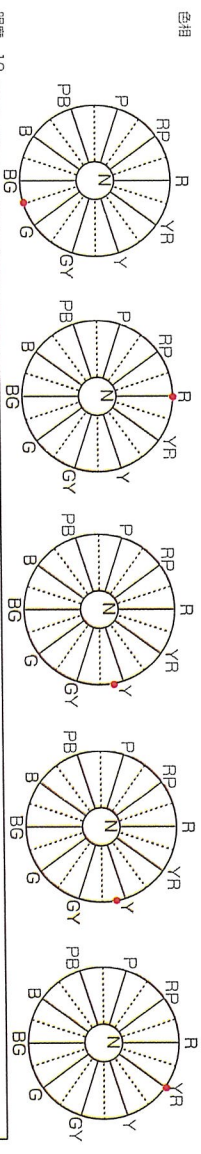
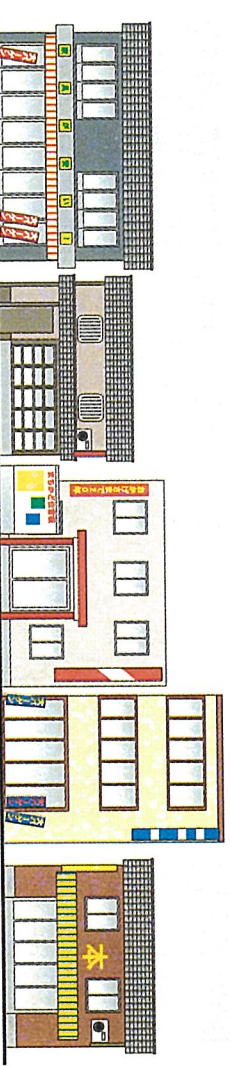
■色彩に連続性があるまちなみ

色彩に連続性がないまちなみでは

隣り合う建物の色の差が大きく、色相やトーンなどにも共通性が見られないため、まちなみのイメージがはっきりしません。

また、建物の高さや屋根の形式、広告物の掲出の仕方などにも共通性がないため、雑然とした印象を与えかねません。

まちなみの様子



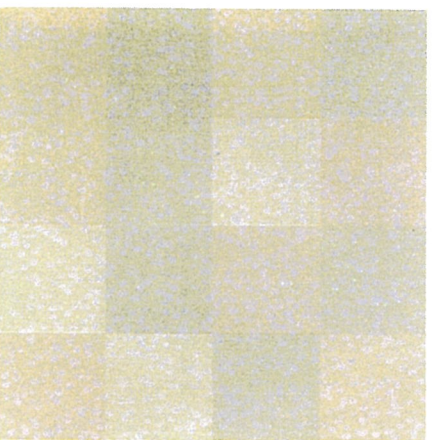
■色彩に連続性がないまちなみ

●隣り合う建物との調和を考えよう
隣り合う建物の色彩に連続性をもたせることが、まちなみのイメージをより明確にします。まちなみの色彩の調和を考えるときには、その手がかかりになるのが、色彩調和の考え方です。ひとくちに色彩調和といってもさまざまな配色の方法が考えられますが、建物の色彩調和の場合は、次の3通りが基本となります。隣り合う建物が似た色を使ったり、色相やトーンをそろえたりすることが、色彩の調和のとれたまちなみをつくる基本になります。



■写真 類似色調和型のまちなみ—菊池市御所通り地区

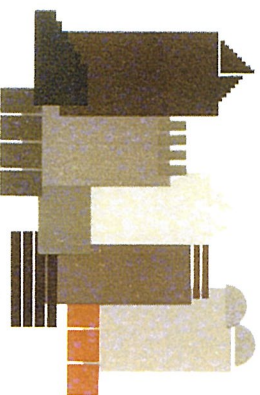
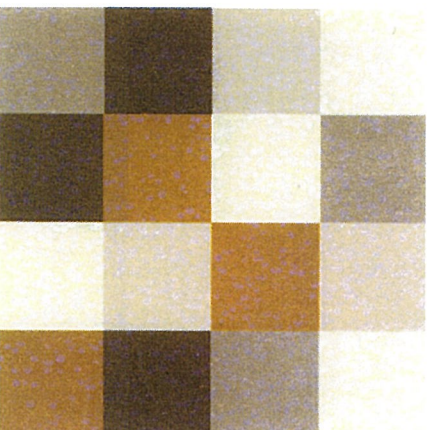
菊池市御所通り地区のまちなみは白やグレーなどの色彩を基調とした建物で構成されています。また、一つひとつの建物も、白い壁に灰色の屋根というように、類似した色彩で構成されています。そのため、まちなみ全体が無彩色の「類似色調和」になっています。



■類似色調和

よく似た色を使った配色

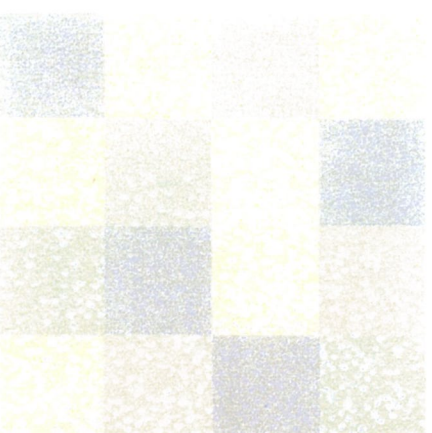
グレー系や茶系というように、似た色彩を組み合わせて用いる配色です。こうした考え方でまちなみの色彩を構成すると、統一感が得られますが、同じような色彩で統一しすぎると単調になるおそれがあります。



■色相調和

色相をそろえ、トーンに変化をつけた配色

色相を同一あるいは類似の範囲内に設定し、明度や彩度に変化をもたせる配色です。木や土等の自然材料を用いた日本の伝統的な家屋の多くは、暖色系色相による色相調和型配色になっています。



■トーン調和

トーンをそろえ、色相に変化をつけた配色

トーンを同一あるいは類似の範囲内に設定し、色相に変化をもたせる配色です。隣り合う建物の色彩を穏やかなトーンでそろえ、色相に変化をもたせると、落ちついた中にも華やかさのあるまちなみを形成することができます。

■図 建物の色彩調和の基本

1-4-3 対象にふさわしい色彩を選ぶ

●建物のイメージを考えよう
 施設の機能や周辺の景観を念頭にしたイメージづくりを建物の色彩は、そのイメージづくりのうえで、大きな役割を担っています。
 一般的な建物の基調色は、鮮やかさを抑えた色彩がふさわしいといえますが、そうした色彩を用いても、色相や明度に変化をつけることによって、さまざまなイメージをつくることが可能です。

下の図は、建物の外装に用いられる色彩とそのイメージを表わす言葉を明度と色相の軸にそって並べたものです。
 色彩の捉え方には個人差があり、すべての人が同じイメージを共有することは困難といえますが、一般的に、R(赤)系やYR(黄赤)系、Y(黄)系などの色相は暖かく親しみやすいイメージに、BG(青緑)系やB(青)系、PB(青紫)系などの色相はクールでさわやかなイメージに感じられます。また、明度の高い(明るい)色彩は軽快に、明度の低い(暗い)色彩は重厚に感じられます。
 建物と色彩のイメージの関わりを考えることは大切ですが、色彩のイメージばかりを誇張すると景観から突出したものになりかねません。周辺の景観との調和があつてはじめて、建物のよりよいイメージが形成されるのです。

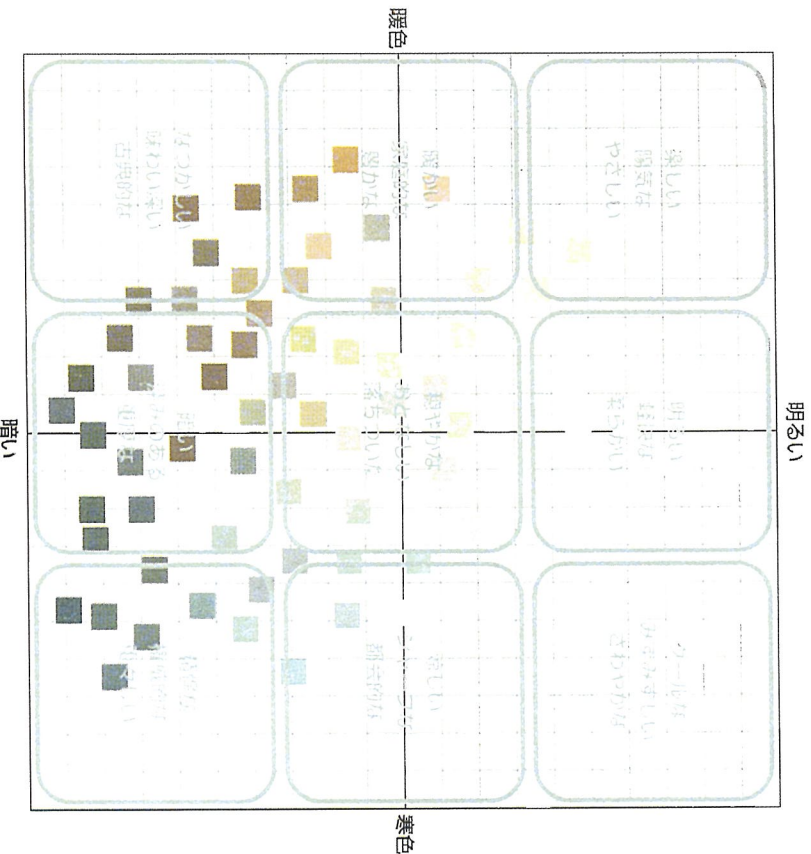


図 建物の外装に用いられる色彩とそのイメージ

●建物としてよく見慣れた色彩を使おう
 親しみやすい暖色・無彩色系色相
 日本の家屋に伝統的に用いられてきた木材や石材、瓦、しっくい、壁土、障子紙等の多くは、自然の材料を加工して得られたものです。
 これらの建築材料の色彩を計測すると、ほとんどがN(無彩色)系やYR(黄赤)系、Y(黄)系などの狭い色相の範囲に収まっています。
 いいかえれば、私たちは永い間、狭い範囲の色彩で構成された建築空間に包まれて、生活を営んできたわけです。

私たちにとって、身近で見なれた色彩である、これらの建築材料の色彩は、私たちにやすらぎを与えてくれるばかりでなく、わずかな色彩の差を読みとり、それらを巧みに組み合わせる、繊細な美意識を養う源泉にもなってきました。
 狭い範囲の色彩の中で美意識を養ってきた私たちが、普段見慣れない色彩を用いる際には、建物のかたちや機能、周辺との関わり方などに十分注意することが必要といえます。

●部位の機能にふさわしい色彩を選ぶ
 屋根色は暗く、穏やかに
 人の手によく触れ、汚れやすい場所に、明るい色彩や鮮やかな色彩が適さないように、建築物の各部位にはそれぞれの機能に照らして、ふさわしい色彩や避けた方が無難な色彩があります。
 建物の屋根色として、さわやかな空をイメージさせる鮮やかな青や陽気なイメージの赤や黄色が用いられることが少なくありませんが、一年を通して風雨にさらされ、埃をかぶることが多い屋根色に、汚れやすい明るい色彩や鮮やかな色彩を使用することは避けた方がよいといえるでしょう。
 また、屋根は建物の外装として大きな面積を占め、熊本らしい穏やかでやさしい色彩景観に大きな影響を与えます。
 周辺とは明らかに異なる鮮やかな色彩を用いて、建物のイメージを誇張することよりも、地域の景観に対する配慮の方が重要といえるでしょう。
 屋根の色彩は、機能や景観への配慮に合致した、暗く、穏やかなトーンの色が基本といえます。